

# いのちを見つめて ～宇宙に目覚めよう～

臨濟宗妙心寺派仁照寺 江角弘道

## 1、はじめに

いのちを見つめると、私たちの命の根源である宇宙にたどりつきます。ここでは、私が宇宙へと目覚めていった話をします。

昭和 20 年に、島根県出雲市の臨濟宗妙心寺派仁照寺の長男として生まれたことが、その最初です。将来は、仁照寺の跡を継ぐであろうことが運命づけられていました。

しかし、文系の科目よりも理系の科目が好きでしたので、宗門の花園大学へは行かず、広島大学理学部物理学科に入学しました。大学 3 年の秋（昭和 40 年）に、朝永振一郎博士が素粒子物理学の「くりこみ理論」でノーベル物理学賞を受賞されました。それに感激して素粒子物理学を研究する研究者になろうと決心しました。今思えば、若気の至りで、自分の能力を超えた夢を持っていました。理論物理学である素粒子物理学は、素粒子という「物」を研究対象として取り組んでいます。初めは興味を持って研究していましたが、とてもこの研究が世のため人のためになるとは思えないと感ずるとだんだんと虚しくなってきました。研究すること自体が、息苦しく感じられる日々を過ごしていました。悩んだ末に、その頃エネルギー問題を解決されるであろう核融合発電というものが、世の脚光をあびて研究が進められていました。そこで、「核融合発電の研究をして、少しでも世の為になろう。」と思い始めました。この思いは、仲の良い友人に話し、彼の賛意を得て、一大決心で、指導教官の小川修三教授（広島大・名古屋大名誉教授）に私の意志を話しましたが、なかなか賛成して頂けませんでした。この頃は理論系の博士課程を修了しても研究が継続できる就職先がなく、多くの博士課程修了者たちが研究から去って行っていました。何度か話している中で、「私は、素粒子物理学で玉砕したくありません。」と口走りました。すると指導教授は、「それならば良いでしょう。」と、やっと研究分野を変えることの許可を頂き、核融合発電の基礎となるプラズマの実験物理に研究の方向を変えました。

ところが、一大決心して研究分野を変えたわけですが、すぐにその分野の研究ができるわけでもなく、「人間、何のために生きているだろう」という大きな疑問に正面から対処しなければならなくなり、研究は全く手に付かなくなりました。こうなると今まで学んできた物理学の膨大な知識が心の中で音を発して崩れて行くような錯覚を覚えました。今まで自由に扱えていた物理学の数式に違和感を感じ、数式が取り扱

えなくなりました。「物理がわからなくなった。」「この一大決心の転向は、間違いではなかったのか。」と思い始め、挫折感を深くして行きました。この時、25歳、人生で初めて出会う「青春の狭い門」です。

## 2、禅への目覚め

この研究も何も手に付かない状態が半年ばかり続きました。その頃は、友人と遊んだり、話したりが苦痛になり、生きて行くこと自体が息苦しくなってきました。私には5歳年下の弟法明がいますので、私が死んでも、弟が寺の跡を継げば良いなどと考えていました。ついに、自殺することを考えたりし、精神はボロボロの状態でした。今思えば、「人間なんの為に生きているのだろう。なぜ生きなければならないのか」という「大疑問」のただ中に居たのでした。そのような人生の時期に、誰に出会うのかということは、非常に重要なことだと思います。私の様子に心配した母が、「今、出雲市の一畑寺で「安居会」という坐禅会をやっているから、ぜひ参加しなさい。」というので、参加しました。そこへ指導者として来ておられた方が、南禅寺派管長の勝平宗徹老師でした。その方が禅の書物である「碧巖録」を提唱なさっていたのですが、私には何のことか分かりませんでした。しかし、その中で「鏡清雨滴聲」（碧巖録第46則）という公案について、安居会の後に、何度も繰り返し、読んでみると、心が少しずつ開けてきて、うつ状態を脱することができました。この公案は、次のようなものです。

「挙す、鏡清僧に問う、門外是れ什麼の声ぞ、僧云く雨滴声。清云く、衆生顛倒して己に迷うて物を逐う。」

当時、この問答は何のことだか全く理解できませんでしたが、この公案のより深い意図はさておき、「衆生顛倒して己に迷うて物を逐う」の部分を繰り返し暗誦していると、自分の状態に気が付きはじめました。それは、「やはり私も自分の外部ばかりに目が行き、外のものだけを追い求めて、迷っていたのだな」ということが薄っすらとわかってきました。これからは、内だ、自己を究明していくんだということ、それがわかったときは、身も心も軽くなりはじめました。これで自分の人生の方向が決定しました。まさに母のアドバイスに救われました。このように心が決まってくると、不思議に研究も順調に進み始めました。また、一畑寺では、座禅中に不思議な体験をしました。自分の周りにお経の言葉が書いてあって、それが私を守っていてくれるという感じがしました。これは、「耳なし芳一」が般若心経を体中に書いてもらっているような感じでした。そして、安居会から我が家仁照寺に帰り、参道から本堂を見ると本堂が輝いて見えました。これは、何かあると思って、本堂で般若心経を誦経すると、心に安心感が湧いてきました。

26歳の頃の日記に青春の心の葛藤を、「広島川」と題して次のように書いていました。

「青い、とにかく青い、川のある風景は青い、さわやかに心をなでてくれる風、あの

日から一年が過ぎた。思えばあの岸で、涙がかれるまで泣いた。その時は満月の夜だった。月の光が朧に見えた。あたりはうすい黄色のようだった。とにかく泣いた。人間泣き続けると、本当にもう一滴も涙が出て来なくなるものだと実感した。その後は、何か重いものがスーッと抜け出ていった様だった。しかし、本当のどす黒い部分は残っていた。そのどす黒い部分は、夏の一畑寺での坐禅でいかにすれば消え去るかを知らされた。それは『俺は守られている』という感じだった。般若心経が自分の回りを取り囲んでくれて、どんな悪をもよせつけない、自分は守られているという感じだった。」

今になって、あの時に見た月は、如来様であったと確信することができます。如来様が見守っていてくださったのです。若き日に大きな夢を持ち、そしてつまずきや挫折を体験したことに感謝せずにはられません。一畑寺での安居会で、生きて行く方向が見えだしてきましたので、翌年の夏、本山妙心寺の安居会に参加しました。この安居会は、主として住職資格を取得するためにある会でしたが、禅修行に向かったの良き入口となりました。

その後、私は縁あって、広島県三原市にある臨済宗仏通寺の藤井虎山老師のもとで、参禅し、公案をいくつか数えました。しかしながら、この当時は、大学での物理学の研究にのめり込んでいましたので、参禅がだんだんと疎かになっていました。そして、平成4年に住職の父が亡くなり、その後を継いで住職となりました。広島電機大学で教授をしながら、島根で住職をすること3年で、疲労困憊しました。運よく、平成7年、出雲市に島根県立看護短期大学が設立されましたので、広島電機大学を退職し、島根県立看護短期大学に転職しました。これで単身赴任せずに自宅から通えますから、安心していました。

### 3、理不尽な娘（二十歳）の死

故郷に帰って4年経った平成11年の12月26日に、二十歳だった娘の真理子が、飲酒運転の車に衝突され命を奪われました。私たち遺族は、本当に無念な思いをいたしました。交通犯罪などの被害者遺族は、亡き子へのいとおしさ、加害者への強い憎しみ、予期せず被害者遺族となってしまった「なぜよりによって私が…」という戸惑いなどから、深く傷つき、悩む日々を過ごしてゆきます。ある遺族たちは、人生の希望と喜びを奪われたと思い、残りの人生をうらみの中に過ごし、中には、自殺をされる方もあります。また、ある遺族たちは、二度と交通犯罪を起こさないようにとの願いをこめて生きて行くようになります。私たちは、縁あって同じく被害者遺族である鈴木共子さんに出会いました。鈴木さんもまた一人息子を、飲酒運転の暴走車に激突され殺されました。彼女は、造形アートという手段で、「二度と理不尽な死は、起こしてはならない。」と被害者の叫びを一般の人々に伝える「生命のメッ<sup>いのち</sup>ッセージ展」を考え出したのです。私達も賛同して、娘のオブジェを毎回展示しています。さらに、

出雲市駅前にある「ビッグハート出雲」で、島根県などの後援を得て、平成 20 年 9

月 12 日～14 日に「<sup>いのち</sup>生命のメッセージ展 in 出雲」を開催しました。この期間に 4000 人もの来場者があり、その反響にびっくりしました。その中には自殺志願者も来ていましたが、多くのオブジェを見て、「がんばって生きていこうと思います。ありがとうございました」という手紙をくれました。これは、「亡き娘が大切な若者の生命をつないでくれた」結果だと思いうれしくなりました。

さらに、「20 歳だった娘真理子は、もっと生きて活躍をしたかったろうに」と思うと、遺された私達遺族は、本当に悲しい・無念な思いをいたしました。そんな時、カーラジオから、野口雨情作詞のシャボン玉の童謡を聞きました。

シャボン玉（野口雨情作詞）

1. シャボン玉飛んだ、屋根までとんだ  
屋根まで飛んで、こわれて消えた。
2. シャボン玉 消えた、飛ばずに 消えた  
生まれて すぐに、こわれて 消えた  
風 風 吹くな、シャボン玉とばそう

特に 2 番を聞いたとき、涙が出ました。それは、シャボン玉が娘真理子のいのちの象徴であるように思えたからです。いろいろなシャボン玉があります。歌の 1 番にあるように高く屋根まで飛んで行き壊れるものもあります。出来てすぐに壊れるものもあります。二十歳で、人生これからというその時期に理不尽に殺されるその無念さは、生まれてすぐに死ぬシャボン玉と重ね合わさってきます。それにしても、この童謡の内容の深さは、作詞者の野口雨情の悲しい体験を歌ったものだと調べてわかりました。野口雨情さんも、そんな無念な葬式に出会われていたのです。悲しい・無念なのは、私達だけではないのです。そう思うと少し悲しさが和らいできました。悲しい時に共に悲しんでくれる人がいる。そのことばがある。そうすれば悲しみは半減して行くのです。私たちは、縁あって、同じ悲しみ・苦しみを持つ被害者遺族に出会い、互いに癒されてゆくのでした。そして、そのことばとしての童謡の詩には、いのちを教える大きな力があることが体験を通してわかりました。

#### 4、「見えるいのち」と「見えないいのち」

この頃、母（江角無為子）は短歌を詠んでいましたので、孫娘の死を悼んで次のような歌を作りました。

「突然の 無常の風に 誘われて 花の二十歳で 涅槃の里へ」

この歌に、家族や親類縁者は、一様に深い感動を受けました。母は平成 19 年 12 月 9 日に浄土に帰りましたが、その名前の“無為”のような人でした。

私は、娘の死によって、本格的に仏教と真正面から向き合っ取り組まざるをえませんでした。それは、「娘の真理子は死んでどこに行ったのか」、「いのちとは何か」、

「いのちは誰のものか」などです。これは、まさに亡き娘から与えられた“公案”でした。無門関第47則に「兜率三関」という難関なことで有名な公案があります。この則の本文の中に「四大分離して何れの処に向かって去る」つまり「死んだらどこに行くか」と問うています。これと同じ公案に取り組むことになりました。この公案は、亡き娘から頂いたものです。今、亡き娘は、私を本当に仏教について目覚めさせてくれましたお師匠さまであるといえます。

娘を失って以来、「“いのち”とは何だろうか。私達のいのちは、どこからきたのだろうか。そして失われたいのちはどこへいったのだろうか。いのちは誰のものだろうか。」等々、いのちと向かい合う日が続いています。そうした中で、仏教は「いのちの教えである」ことに気付きました。さらに物質の探求を目的にしている、いのちとは無関係と考えていた専門の物理学が、「いのちの根源」を考えるとときに、仏教と深い関わり合いあることに気付きました。

「娘真理子はどこに逝ったのだろうか。」と悶々と娘のことを思っていると、次のような事実に行き当たりました。それは、私が結婚する前には、娘は世の中のどこにもいなかった。そして、昭和54年に二女として生まれてきて、私たちと20年間一緒に暮し、死んでいった。だから、今はこの世の中のどこにもいないということです。つまり、いのちが無（空とも言える）から出てきて実在（色とも言える）となり、実在（色）から無（空）へと帰っていったこととなります。般若心経には、有名な語句「色即是空 空即是色」があります。並べかえて空即是色 色即是空とすれば、空——>色——>空と展開しているようです。

私たちは、「空」から来て「色（形のあるもの）」となり、「色」から「空」に帰る存在であるわけです。仏教では、このことを「成住壊空」と言います。「成」とは、生まれてくること、「住」は、この世に住んで生活（成長し、結婚など）すること、「壊」は、私達の体がだんだん壊れてゆく（老衰）こと、「空」は、死んで空になることです。空に帰る、つまりその帰るところは「いのちの根源」、「生まれ故郷」、「浄土」であるわけです。

私達は、ふだん、さまざまな意味に“いのち”という言葉を使っています。日本国語大辞典（小学館）によると、いのちの意味は6つあると示されています。①人間や生物が生存するためのもとの力となるもの。古事記では、「伊能知（イノチ）」と書き、万葉集では、「伊乃知（イノチ）」と書かれている。②生涯。一生。生きている間。③運命。天命。「命なりけり」という使い方をする。④唯一のたのみ。唯一のよりどころ。⑤そのもの独特のよさ。真髓。⑥男女心中の入れ墨の文字〔命〕。これから“いのち”についてまとめると、①と③はいわば、“見えないいのち”であり、②と④と⑤と⑥はいわば、“見えるいのち”といえます。

また、語源説については、8つの説があります。①イノウチ（息内）・イノチ（気内）の義。またイキノウチ（息内）の約。②イキノウチ（生内）の約。③イノチ（息路）の義か。④イノチ（息続）の意。⑤イキネウチ（生性内）の約。⑥イノキ（胃気）

の転声。⑦イノチ（息力）の義か。⑧イノチ（生霊）の義。この語源説の中で、イキノウチ（息内）は、直接的に明快にいのちについて語っています。つまり人間は、生まれるとき「オギャー」という声で息を吐き（呼）、死ぬのは「息を引き取る」と言う、だから死ぬときは「息を吸う」わけです。従って、生きていることつまり「見えるいのち」とは、まさしく呼吸をしている息のある内です。

これから“いのち”には主として2つの意味があります。第1には、「生物が生きていくためのもとの力となるもの」（見えないいのち）です。第2には、「生きている間、生涯、一生」（見えるいのち）です。

解剖学者の三木成夫は、“見えないいのち”について、「生物には親子代々の連続がある。およそ現代まで40億年の連続で、親から子へ、子から孫へ、孫から曾孫へと波状に伝わってゆくものである（図1参照）。

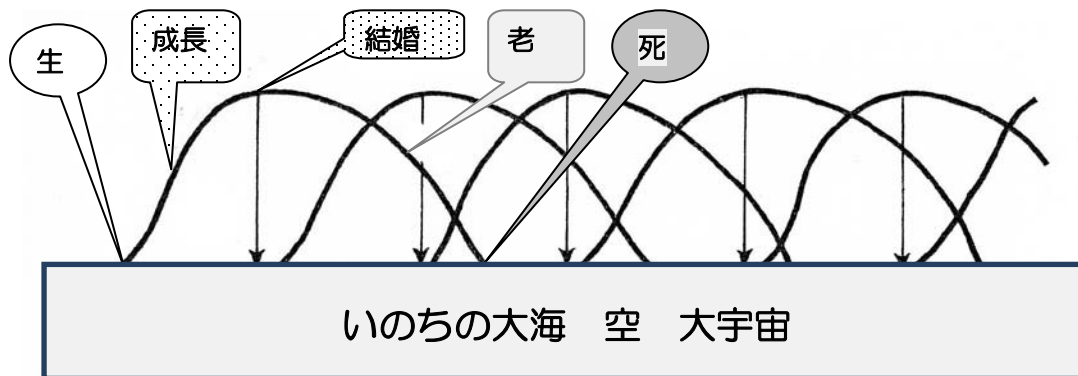


図1. いのちの波

そのような波をもたらす源としてのいのち（生物を連続させていくもとになる力）である。」と述べています。一遍上人には、「身を観ずれば水の泡 いのちを思えば月のかげ」という道詠があります。私達一人一人の身は、言わば大海の中の水の泡の一つ一つのようにあり、消えれば元の水（空と考えられる）に帰って行く存在なのだ。そしていのちを思えば、月のかげ（月かげとは、月の影ではなくて、影を生じさせるもとになるもの（太陽）で、阿弥陀仏の光明そのものを意味している。）であると。

## 5、現代科学と仏教の接点

私たちの命は、父母から誕生し、その父母は祖父母から誕生し、そして祖父母は、曾祖父母から誕生してきました。このように遡ってゆくと10代前で1024人もの人の命が関係しています。100代前で $1.26765 \times 10^{30}$ 人もの莫大な人の命が関係しています。1代を30年と仮定すると、100代前とは、3000年前であり、古代の文明があった時代です。さらに遡って、ほ乳動物の中の霊長類に分類される生物が、出現したのは今から約6500万年前、恐竜が絶滅する少し前といわれています。

最初の生命は約40億年前、地球誕生から6億年たった頃の中での誕生したと考えられています。材料となった基本的物質は原始大気中の成分：メタン、アンモニア、二酸化炭素などでした。これらにエネルギーを加えることによって、生命の素材は作

られたのです。エネルギーは太陽光、雷の放電、放射線や熱、紫外線などによってもたらされたものです。こうして生命を構成する基本的な物質、有機物を合成しました。原始スープにごちゃごちゃになって海の中を漂っていました。その中でこれらの物質が反応することによって、初めての生物は生まれたのです。生命は、あり得ないほどの極小の確率で、物質粒子から誕生した不思議な存在であるといえます。つまり私たちの命の起源は物質粒子です。物質は、物理学の対象であり、それについて考察することは“いのち”についての考察をすることになります。ここに、物理学と“いのち”との接点があります。

現代宇宙物理学によりますと、「私たちの宇宙は137億年前に始まった」ことが観測事実から裏づけられています（ビッグバン仮説）。今から137億年前のビッグバンという大爆発があり、その後天の川銀河ができ、太陽系ができ、地球ができ、地球上に生命が生まれ、人類が生まれ、そして私たちの先祖様が生まれました。宇宙が始まったことと私が生まれて生きていることとは、137億年という想像もできないほど長い時の隔たりはあるにしても、直接に関係しています。

だから、「宇宙の始まりは私という存在の始まりでもある」ということになります。137億年前、宇宙は、限りなく小さい状態から爆発的に拡大しはじめたということは、宇宙の初めには、すべてが「ばらばらのモノ」の寄せ集めではなく、たった「1つのエネルギー」だった、つまり「すべてが1つ」だったことになります。つまり「宇宙は、始まってから今までずっと1つのままだ」と考えられるのです。

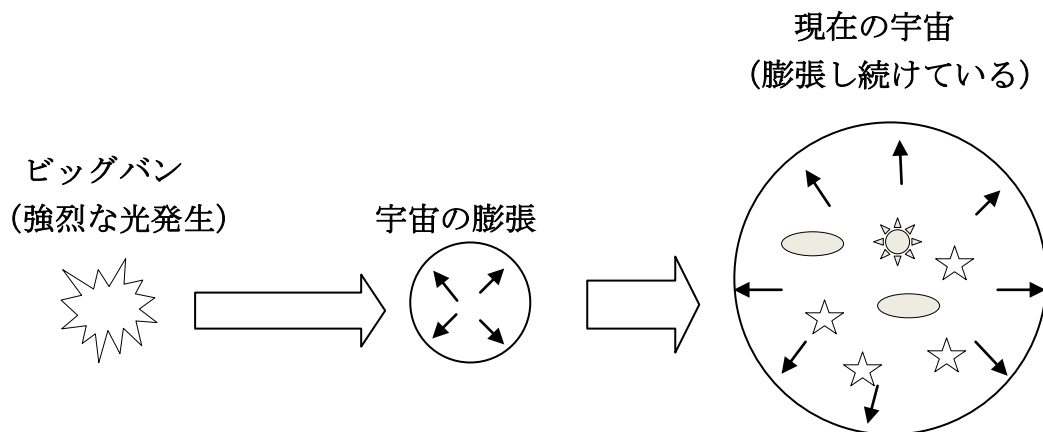


図2. 宇宙の歴史

そして以後137億年の間、ただのばらばらに分離したモノが何の秩序も方向性もなくでたらめに運動していたのではなく、宇宙は、星雲を生み出し、無数の銀河、その中に私たちの天の川銀河、太陽系、地球を生み出し、そこに多様ないのちを生み出し、多様ないのちの中に心と魂を持った存在・人間を生み出してきたのです。

## 6、宇宙カレンダー

有名なアメリカの科学者、カール・セーガンは、長過ぎてつかみにくい宇宙の歴史を1年365日に縮尺してイメージしやすくした「宇宙カレンダー」を作成しました。

宇宙カレンダーによりますと、1日=3753万年に相当、1時間=156万年に相当、1分=26000年に相当、1秒=433年に相当します。

宇宙で最初にできた元素は、水素であり、最初の十万年くらい（カレンダーで1月1日午前0時3分31秒）である。私たちの体は、70%近くが水だといわれる。水は、分子式でいうとH<sub>2</sub>Oだから、水分子一個の中には水素原子が二個入っていることになる。つまり、私たちの体の中に、ほかの分子の構成要素としても入っているが、まず何よりも水というかたちで水素原子が入っている。これから考えると私たちのいの中には、宇宙137億年の歴史が込められているといえる。私たちの体の中に、そのあとからできたいろいろな原子ももちろん入っている。ということは、私たちは全身隅から隅まで宇宙製であり、体の中に宇宙137億年の歴史がそのまま入っていることになります。

### 1月1日0時0分（137億年前）：ビッグバン

1月8日頃（130億年以上前）：星の創発

5月13日（100億年前）：天の川銀河の創発

8月20日（48～50億年前）：原始太陽系の創発

8月31日（46億年前）：地球の創発

9月16日（40億年前）：海の創発

9月16日頃（38～40億年前）：地球での生命の創発

9月23日（37.5億年前）：地球での既知の最古の岩石生成

9月29日（35億年前）：最古の生命化石

10月18日（27～28億年前）：酸素発生型光合成生物の創発

11月3日～（19～22億年前）：大気中の酸素量の増加開始

11月21日（15億年前）：有性生殖の創発

11月29日（12億年前）：酸素大気が地球上をおおいはじめる

12月5日（10億年前）：多細胞生物の創発

12月16日（5億7000年前）：無脊椎動物繁栄

12月18日（5億1000万年前）：最初の脊椎動物＝魚類の創発

12月19日（4億3900万年前）：植物の陸地移住はじまる

12月20日（4億800万年前）：昆虫の創発。動物の陸地移動はじまる

12月22日（3億6200万年前）：爬虫類の創発

12月23日（2億9000万年前）：哺乳類型爬虫類の繁栄

12月25日（2億4500万年前）：恐竜の創発

12月26日（2億800万年前）：鳥類の創発、哺乳類の創発



- 1 2月29日(6500 万年前) : 霊長類の創発
- 1 2月30日 (3600 万年前) : 大型哺乳類繁栄、霊長類の前頭葉の初期進化
- 1 2月31日 14 時頃 (1600 万年前~) : 人類の誕生
  - 22 時 30 分 (234 万年前) : 人類が火、道具、言葉を使う
  - 23 時 59 分 54 秒 (2400 年前) : 釈尊の誕生
  - 23 時 59 分 55 秒 (2000 年前) : イエス・キリストの誕生
  - 23 時 59 分 58.3 秒 (737 年前) : 無相大師の誕生
  - 23 時 59 分 59.2 秒 (328 年前) : 白隠禅師の誕生

天の川銀河は、5月13日(100億年前)から創り始められて、現在では、図3のようになっていると観測されています。



図3. 天の川銀河

理論物理学者の佐治春夫氏は、著書「からだは星からできている」の中で、「今、あなたの足元にいる一匹のアリも、そしてあなた自身という存在も、137億年前に、一粒の光から生まれ、何度も枝分かれしながら進化を繰り返し、今、ここにいるのだという事実を教えてくれるのは、現代科学によって語られる宇宙論です。そのときの”光“があなたの中に、今も輝いています。」と述べられています。

このように生命は、ある時を境にして生まれたのではなく、ただ、宇宙の始まりか

ら、あるいは、それ以前からある<命>という、途切れることのない流れの中に現われたものだと言えます。その根源が、「見えないいのち」（生物を連続させていくもとなる力）です。

## 7、霊性の流れ

### 7-1、霊性

18世紀末のドイツロマン派詩人のノヴァーリス(1772~1802)の「フラグメンテ(断片集)」の中にある次の詩は、その人の深い感性を感じさせます。それは、霊性といっても良いと思われれます。

すべての見えるものは、見えないものにさわっている  
聞こえるものは、聞こえないものにさわっている  
感じられるものは、感じられないものにさわっている  
おそらく、考えられるものは、  
考えられないものにさわっているだろう

この詩は、般若心経の中の名句「色即是空空即是色受想行識亦復如是」と対応していると考えられます。対応関係を示せば、次のようになります。

見えるもの・・・・・・・・色 ⇔ 見えないもの・・・・・・・・空  
聞こえるもの・・・・・・・・声 ⇔ 聞こえないもの・・・・・・・・空  
感じられるもの・・・・受・想 ⇔ 感じられないもの・・・・空  
考えられるもの・・・・行・識 ⇔ 考えられないもの・・・・空

これらのものは、すべては「空」と関係しています。それは「大いなるもの・霊性」と関係していると考えられます。

また、次の金子みすず(1903~1930)の詩にも、「大いなるもの・霊性」の働きと関係していると考えられます。

#### 蓮と鶏(金子みすず作詞)

泥の中から 蓮が咲く それをするのは蓮じゃない  
卵の中から 鶏が出る それをするのは鶏じゃない  
それに私は気がついた それも私のせいじゃない。

さらに、陶芸家である河井寛次郎(1890~1966)は、彫刻、書、詩や随筆などについても優れた作品を残しています。随筆集「火の誓ひ」(209頁)の中の次の詩にも、「大いなるもの・霊性」の働きが考えられます。

「だれが動いているのか これこの手」

これら詩から、「霊性」について考察することは、「いのち」について考察することになります。私たちの「いのち」はどこからきたのでしょうか。今、私たちが生きて



を「サムシング・グレート (something great)」と呼んでいます (生命科学者 村上和雄氏)。

筆者は、20代の頃から35年間物理学の研究に携わってきました。その間に臨済禅の修行も少しばかり経験をしてきました。そんな中で、50代半ばに「二十歳の娘 (二女) の理不尽な突然死」と遭遇し、その後、河波定昌上人の法話、山本空外上人の本「念仏と生活」、無二的人間」、山崎辨栄上人の本「人生の帰趣」、宗祖の皮髓」に出会いました。このような経緯の中から、物理学と仏教が共に宇宙の真理・法を探求するものであることがはっきりしてきました。

河波定昌上人は、仏教は「ひかりの現象学」であると述べられています。筆者は、この言葉に目覚めさせられて、物理学は「エネルギーの現象学」であることが深く受けました。だから、現在はありがたい御上人方と不思議なご縁でお会いできたおかげで、ビッグバンはまさしく「阿弥陀仏の法身からのエネルギー」であるということが領けます。今、現に生きながらえていることも決して私の力ではない。育ててくれた親のおかげ、助けてくれる家族、地域の人々、社会、国家のおかげそして水や空気や食物のおかげと数えきれない一切のおかげを頂いている。すべてのものは、重重無尽な相互依存の関係で存在しているのです。それを言い換えれば、阿弥陀仏のおかげによって生かされているのです。そして、その「阿弥陀仏様のおかげ」と感じさせているものこそは、霊性といえるものではないでしょうか。私も有馬氏にまねて、一句詠んでみました。

#### 「ビッグバンのおかげなりしやわが命」

普通一般の人は、霊性の存在を感じずに一生を終る場合もありますが、修行をされた人、苦難を乗り越えられた人などは、霊性を感じておられます。妙心寺派の管長や花園大学の学長をなされた山田無文老師 (1900~1988) が、修行時代に結核に侵され、自宅に帰られて療養をされていた苦難の頃に、ある朝、ふと障子を開けて、濡れ縁に出られた時、一陣の風を感じられたその時に感動され、その想いを次の歌に託されました。

#### 「大いなるものに抱かれあることを、今朝吹く風の涼しさに知る」

この時、無文老師は、「人は決して自分一人で生きているのではない。大きな力に生かされておるのである」ことを実感され、「ああすまんことでした。もったいないことであつた。」と、とめどもなく歓喜の涙を流されたとのこと。この「大いなるもの」は、実は「霊性」といえるものです。この歌が出来る直前に無文老師は、『いったい風とは何だろう』と考えられて、『空気がうごいているんだ』、『空気！ そうだ！ 空気と言うものがあつたんだなあ』と空気の存在に感動をされています。この瞬間、無文老師は、風 (空気) に「大いなるもの」つまり「霊性」を感じられていたのです。それは常に存在し、私たちを生かしているものであり、それが私たちの呼吸となって「いき」する時、それが私たち自身の「いき」る根源となり、いわゆる「生きる」ことは「いき (呼吸) する」ことであり、「生命の根源」と一つに連なっている

たのです。そして、私たちは、生きているのではなくて、空気に（靈性に）生かされているのです。

河波定昌上人は、「靈性とは、天地にわたって全宇宙的に満ちており、どこまでも天空的であり、また大地的である。それゆえにこの靈性は普遍（偏在）的なものであるが、現実には日本的靈性やドイツ的靈性、そしてフランス的靈性などが考えられる（河波昌著：「形相と空」、138頁）。」と述べられている。

靈性は、人類が誕生してきてから、それぞれの場所で特有な名前と呼ばれるようになったと考えられますが、実は人類が地球上に現れる前から流れていた、つまり宇宙の始まりから流れていたということが考えられます。

## 7-2、日本的靈性について

日本の禅文化を海外に広くしらしめた仏教学者の鈴木大拙師（1870～1966）は、昭和19年（1944年）に著書「日本的靈性」を刊行されました。靈性は普通に精神と言っているはたらきと違うものである。精神には倫理性があるが、靈性はそれを超越している。精神は分別意識を基礎としているが、靈性は無分別智であると著書の中で述べている。それは明治期以降の近代日本が理性に偏重していた当時に、近代理性中心主義からの転換を、「靈性」という言葉で日本国民に警鐘をならしたのだろうか。

また、「靈性を宗教意識と言ってよい。ただ、宗教と云うと普通一般には誤解を生じ易いのである。日本人は宗教に対して余り深い了解を持っていないようで、或いは宗教を迷信の又の名のように考えたり、或いは宗教でも何でもないものを宗教的信仰で裏付けようとしたりして居る。それで宗教意識とは言はずに靈性と云うのである。が、元来宗教なるものは、それに対する意識の喚起せられざる限り、何だかわからないものなのである。これは何事についても、云われ得ると思われるが、一般意識上の事象なら、何とかいくらかの推測か想像か同情かが許されよう。ただ宗教についてはどうしても靈性とでも云うべきはたらきが出て来ないといけないのである。即ち靈性に目覚めることによって始めて宗教がわかる。」（鈴木大拙全集 第8巻 22頁）と述べている。

さらに、「宗教は、人間の精神がその靈性を認得する経験であると云われるのである。宗教意識は靈性の経験である。精神が物質と対立して、かえってその桎梏に悩むとき、自らの靈性に触著する時節があると、対立相剋の悶は自然に融消し去るのである。これを本当の意味での宗教と云う。」（同書 24頁）と述べている。そして、日本的靈性の成立を鎌倉仏教にみていました。

河波定昌上人は、「日本的靈性について」次のように述べられている（河波昌著：形相と空、139～141頁）。

「靈性とはたんなる人間の觀念論的ないとなみにとどまるものではない。それはどこまでも真実にして現実的なるものの生起である。それゆえに日本的靈性の展開も、

華嚴的表現を借りればそれは「如来性起」あるいは「如来出現」の一環をなすものにほかならない。全宇宙的に遍在する靈性が、私たちのうちに現起してくるのである。それは宇宙論的な生起である。鈴木大拙はその具体的な展開を鎌倉仏教以降に見ていた。

この靈性は私を包んで私のあらゆる側面にはたらきかけるものであり、また私を突き破って私の内奥の根底からはたらき出るものでもある。そこでは外(超越)が内(内在)であり、内が外である。両者は不二であり相即的である。

この靈性はまた理性が分別的、部分的であるのに対して、全体的であり、包含的である。それゆえ靈性は感性的なるものの尖端にも全面的にはたらく。有名な芭蕉の俳句である、

あら尊と 青葉若葉に日の光

ここでは日常的に経験する日の光に靈性的なものが現起している。日の光に対する感覚は、その感覚を通して靈性的なものを喚起している。「あら尊と」とは日常的なるものに対する靈性の突破を示している。日本民族の、感性的なものに即して靈性的なものを実現していく態度は、世界的にも卓越無比である。

自然の豊かさに恵まれた日本人にとって自然とは、豊かな靈性の基盤をなすものであった。日本人は気づこうと気づくまいとにかかわらず、事実として無意識のうちにこの自然の靈性と感応道交していた。月の清浄さに感動しつつ、靈性の清浄さと現実的な交わりがあった。鈴木大拙も人々を戦争にかり立てたイデオロギーとしての国家神道をきびしく批判しつつ、その奥底に素朴ではあっても本来は豊かな靈性としての自然そのものを洞察していたことは注目すべきである。

自然科学の立場において見られるように、自然を対象化し一面的に見ることによって靈性は消滅する。近代はこの靈性を理性によって殺戮してきた時代であった。近代的自我の確立が、その原因となっていた。その近代的自我の超克の上にはじめて、より高次の豊かな靈性的自我が展開される。大拙の『日本的靈性』の意義は、実に測り知れないほど重要である。」

また、「日本的靈性—雪月花の奥底にはたらくもの」という講演(2010年12月8日)では、として次のように語られました。

「日本的靈性は、1万年も続いた縄文時代から始まっていた。そしてそれは弥生文化、そして大乘仏教の受容を通して限りなく深められていった。鎌倉仏教もその顕著なる一契機となるのである。

日本の美形成の三要因としての雪月花も靈性的背景なくしては徹底しない。例えば、雪は斎潔(ユキ)であり雪ではない(斎(ユ)は神女が神前で神事を行う様を示すものであり、潔(キ)は清浄の行為である。花、とりわけ「サクラ」はさ(神性)がそこに現前する場(クラ)であり、花見とはそこに神聖さを見る呪術的ないとなみであった。花もまたそれを見る単なる私たちの主観のいとなみの次元の問題ではなく、むしろ靈性が花となって働いていたというべきである。それは、人間の主観以前の問題

である。月見もまた月の清浄さ、円満さを自らの内に取り込む呪術そのものである。月を詠む和歌もまた呪術的行為が先行していたのである。月も縄文文化の核をなすものであった。それは狩猟経済と不可分のものであったが、又その月は清浄さ、完全性等の霊性文化形成の核をなすものであった。月に関しては無数ともいえる程の歌が詠出されているが、次はその数例である。

秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出ずる月の影のさやけさ

(左京大夫顕輔)

あかあかや あかあかあかや あかあかや あかあかあかや あかあかや月

(明恵)

月かげのいたらぬさとはなけれども ながむる人のところにぞすむ

(法然)

月を見て月に心のすむ時は 月こそ己が心なるらめ

(山崎辨栄)

このような伝統的な霊性基盤から人間形成がなされていったのである。この霊性は、まさしく人間形成の核をなすものであり、雪月花となって働いているのである。つまり雪月花をとおして「感応道交」が行われている。森や湖水や林などに霊的な場所があり、霊性はいろいろな形で現象してくる。そして法然上人の歌『阿弥陀仏と心は西に空蟬のもぬけはてたる声ぞすずしき』にあるごとく、念仏の中で霊性が現象してくるのである。」

### 7-3、霊性の流れ

一方、近代において、「霊性」を深く展開されたのは、山崎辨栄上人(1859~1920)であった。鈴木大拙師に先行すること半世紀くらい前から、豊かな展開をなされていた。辨栄上人遺稿要集である「人生の帰趣」(10頁)に、霊性が次のように説明されている。

「仏教に、人の心性に仏性と煩惱との両面を持っていると説いてある。仏性の方は人々具有するもまだ伏能である。例えば鶏の卵の様なものにて之を孵化して雛としなければ鶏となることはできぬ。卵の中に鶏となり得られる性をもっているのが外部から容れるものではない。霊性は本来各自具有している。外界から仏性が容れられるものではないと。また仏性と共に煩惱という罪惡の性ももっている。この煩惱は大霊の力によって霊化せられる。即ち煩惱は菩提である。即ち高等なる道德心と成るのである。例えば渋柿の実もよく乾燥して甘干となれば渋味が変化してかえって甘味となるごとくである。」と述べられている。ここでは、霊性は仏性と同義のものである。霊化とは、鈴木大拙の言う「霊性に目覚めること」に対応している。

この霊性なるものが何より生まれ、現在までどのように成長してきているのであろうか。まず、辨栄上人は、「仏法という真理は、宇宙の大法である。宇宙の大勢力は、太陽及び地球等の万物の設備をもって、一切の生物界を生成し原始生物極小の生物よ

りして進化せしめて、ついに終局は永劫の大涅槃に帰趣せしむるの势能なり（7ページ）。」と説明されている。これを現代科学的に考えれば、宇宙の大勢力とは宇宙の始まりのビッグバン（大爆発）の大エネルギーに相当すると考えられる。このエネルギーの流れるところでは、太陽や地球が生成され、そして地球上に生物を生じさせ、ついに人類を誕生させて、その人類を、やがて大涅槃に帰趣させるエネルギーとして流れるということになる。

上記のことは、「生産門」として次のように説明されている（179頁～180頁）。

「法身より世界を發展し、世界より衆生を産出したる次第を論ずれば、先づ一大法は万有の本源にて即ち大心霊である。その属性の一切智と一切能との働きにより世界万有を發展してきたものであり、もしこれを外部より見れば因縁と因果とに形成せられる世界と及び衆生である。さらに言を換えて言えば、いわば法身は、大造化の故にその分身たる世界もまた中法身造物主である。衆生もまた小法身造化と云う事ができる。

大法身が常恒の遍動に依って世界を活動せしめ、世界もまた常恒の活動によりて、衆生を生活せしむ。各位共に全力をつくして生活し活動して止まぬ。絶対に比せば大海の小浮たる太陽系においても、また下りて衆生に於ても、何れも進化の為に常に努力しつつある状態を見よ。

先づ、太陽が初め星雲の状態より無数の時間を以て自己を完全せんとしての努力の結果は、すでに成功を遂げて大威力ある恒星を成す。而して絶対者の威力の分身をあらわし、しかも天体の親として、地球という子を分娩し親の恩寵は、子の為に常恒に力を注ぎて休息すること無し。地球もまた、初めガス態より努力の結果は、生物なる無数の子を産みて之を養成す。其の地球も高等なる動物を養う資格未だ完備せざる間は、微小の生物を発生してきた。動物の原始状態においてもその初めアミーバ底の生物として世に現はれてきた。其の極小なる生物にも、法身よりの一系統を受けたる性能を具有しているを以て、外縁の許す限りは発達せんとする。其の内に絶対より受けたる活力あり。ほかにこれを助成する機関あり。これが植物等と共に増進し、生物を進化せしむる内外の因縁によりて漸次に発達した。

かくて無数の階級を経て、ついには人類という高等なる動物に現化せり。人類もまた原始的なる不完全の状態より漸次に完全に向かって進んできた。人類進化の目的は他の科学者の方より見れば、また見解を異にするけど、吾人宗教的立場より言及すれば、生理機能なる即ち肉体は手段にして、精神の方面に於て、永遠不滅の生命に入りて真の目的をとぐるところに在るものとす。即ち人の精神の奥底に潜める最高等なる靈性を發揮し、如来の聖旨にかなう靈的人格となり、終局は、本覺の涅槃に帰着するところに在るものとなす。」

以上から、ビッグバンから流れ出た想像を絶する莫大なエネルギーの流れは、「靈性の流れ」とも言えると考えられる。そして、ビッグバンの引き金を引かれた方こそは、宇宙の大靈体なる法身如来（大ミオヤ）であろうと考えられる。



「ぞうさん」や「やぎのゆうびんやさん」などの童謡の作家として有名なまど・みちお氏に、「水は うたいます」という詩があります(まど・みちお全詩集、理論社)。

水は うたいます  
川を はしりながら  
海になる日の びょうびょうを  
海だった日の びょうびょうを  
雲になる日の ゆうゆうを  
雲だった日の ゆうゆうを  
雨になる日の ざんざかを  
雨だった日の ざんざかを  
虹になる日の やっほーを  
虹だった日の やっほーを  
雪や氷になる日の こんこんこんこんを  
雪や氷だった日の こんこんこんこんを  
水は うたいます  
川は はしりながら  
川であるいまの どんどこを  
水である自分の えいえんを

ここでは「水」が靈性と呼ぶべきものに当たり、その水が縁に従って海の姿となり、あるいは雲や虹の気体状態となったり、雨の液体状態となったり、雪や氷という個体状態となったりして変化しています。まど・みちお氏は、「ひとつの水の無限の姿であって、別のものではない」というのです。靈性は、縁に従ってさまざまな姿となり、流れて行くのです。そして人間の姿にもなったのだと考えられます。だから、凡夫が修行して悟ることで、初めて仏性・靈性を手に入れるということではなくて、初めから靈性が備わっていることに気づかず迷っているのが凡夫なのだということです。私たちは、靈性の働きによって生かされているのです。気づくとか気づかないとかにかかわらず、心臓が動き、呼吸ができ、話すことも、動くことも、食べることも、すべて靈性からの働きかけによるものであるということです。

科学者のジェームズ・ラブロックによって、地球と生物が相互に関係し合い環境を作り上げていることから、地球をある種の「巨大な生命体」と見なすガイア仮説を述べました。物質である地球を生命体とみなすのは、両者にある重々無尽な相互依存関係です。従って、大宇宙そのものも、ひとつの生命体として活動していると考えられます。成人した人間は、約 60 兆個の細胞から構成されていますが、それらが一糸乱れず法則のもとに活動しつづけているおかげで、ひとりの人間の「いのち」が現れています。これと同じように、大宇宙の「いのち」は、地球や太陽がひとつの生命体と

して活動することにより、現れているといえます。釈尊はこのありようを「縁起の法」として悟られました。釈尊は、三十五歳の十二月八日未明、暁の明星（金星）がひときわ明るく輝いた時、宇宙の大法である「縁起の法」を発見せられました。この縁起の法は釈尊の出世に関係なく永遠の過去から未来まで、宇宙に存在するあらゆる物を貫き、働いています。この法こそが、『大いなるもの』であるといえます。釈尊は、光（金星の光）に如来を感じられていたのです。

たまたま釈尊によって発見されたから仏法と名づけるのであって、それは物理学の万有引力の法則のごとく、いっどこで、だれでも認めなければならないものなのです。さらに、この偉大なる悟りをおひらきになったとき、まず口をついて叫ばれたことは、「奇なる哉、奇なる哉、一切衆生悉く皆如来の智慧徳相を具有す」というお言葉でありました。また「一仏成道して法界を觀見すれば、草木国土悉く皆成仏す」というお言葉であったと申します。大自覚にはいられた釈尊が、自ら反省してみられたとき、その自覚の内容である智慧と慈悲は、修行してえられたものではなく、万人がひとしく、生れながらにして心中に内存しておるもの・靈性であったことに気づかれて、驚喜されたのです。

また、一休宗純禅師（1394～1481）には修行中の次の歌がある。

「本来の面目坊が立ち姿、一目見るより恋とこそなれ」、

「我のみか釈迦も達磨も阿羅漢も此の君ゆえに身をやつしたれ」

これらの歌は、「大いなるもの」に触れたい会いたい一心で高次の恋（靈恋）をしている様子を歌ったものである。それは、「大いなるもの」に接触しないと、自己の靈性（仏性）が目覚めないからであると考えられる。そして悟りの歌として、次のものがある。

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声聞けば、生まれぬ先の父ぞ恋しき」

この歌の意について、辨栄上人は、「我らは今、人間に生まれ出しも、我が心霊が何れより来たかということも知らない。また、死して何れに趣向すべきやもしらず、闇より闇にさまよう凡夫である。しかるに先覚者なる釈尊の教えたる経文を読み初めて我らは、無明を父とし、煩惱を母として生を受けたるもの、その先の迷い出ぬ昔の本覚真如の都に自性天真如来という真の父の在ますと聞いてより心の奥底に潜める靈が喚起されてしきりに天真のミオヤが恋しくなるということである。」（人生の帰趣、451頁）

童謡詩人の金子みすずに次の詩があります。

**はちと神さま（金子みすず作詞）**

はちはお花のなかに、お花はお庭のなかに、  
お庭は土塀のなかに、  
土塀は町のなかに、町は日本のなかに、  
日本は世界のなかに、世界は神さまのなかに。  
そうして、そうして、  
神さまは小ぢゃなはちのなかに。

この詩は、超越（世界（はちはその中に一つ）は神様の中に）と内在（神さまは小ぢゃなはちのなかに）を分かり易く述べています。神様の中に私がおり、私の中に神様がいる。超越と内在が一つになって働いてくること、外から働きかける者が内から湧き出てくるのです。私のところがなくなったとき（空になったとき）に、滾々（こんこん）と私のところの奥から泉の如く湧き出てくる者があります。まさに「靈性」が流れ出て働きだすところを詩っています。華嚴経の中に「一々の微塵の中に、各々仏あり」とあります。

## 8、宇宙意識に目覚めること

鈴木大拙師の著書「日本的靈性」の中には、「靈性を宗教意識と言ってよい。宗教についてはどうしても靈性というべき働きがでてこないといけない。即ち靈性に目覚めることによって始めて宗教がわかる。」「宗教意識は、靈性の経験である。精神が物質と対立して、却ってその桎梏に悩む時、自らの靈性に触著する時節があると、対立相克の悶は自然に融消し去るのである。これを本当の意味での宗教という。日本的靈性は鎌倉時代に始めて目覚めた。」とあります。しかし、日本的靈性は、1万6千年前の日本人のルーツである縄文人の時代に目覚めていたとも考えられます。縄文人は、靈性という言葉こそ知らないが、それを縄文人は、朝日や夕日また星や雲などの自然のものから感じ取っていたのではないのでしょうか。さらに思考を進めると、「靈性は、ビッグバンの時代から滔々と流れてきている」と考えられます。人類だけが靈性に目覚めることができたのではないかと思っています。

人類で、初めてはっきりと靈性に目覚められた人こそ釈尊であったと考えられます。釈尊は、宇宙はもともとすべては一つで、それが繋がり合いながら、それぞれの姿をもって存在しているという事実にはっきりと目覚め、それを「縁起」という言葉ではじめて表された人であると考えられます。換言すれば、宇宙は、137億年かけて靈性に目覚めた人＝釈尊を生み出したといえます。

この靈性は、「仏性」と言うこともあります。また、「阿弥陀（アミダ amita）」とも言います。生命科学者の村上和雄氏は、それを「サムシング・グレート（偉大なる何者か）」と名付けています。それがすなわち「見えないいのち」です。この村上氏は、科学者として、遺伝子を研究する中で、「見えないいのち」を感得されています。

サムシング・グレートは、人間の親の親、そのまた親の親とさかのぼって、生命のもとのもとから創った「生命の親」であり、「生命の設計図」を書いてくれた大自然の偉大な力であると説明しています。宇宙物理学者の桜井邦朋氏は、著書「なぜ宇宙は人類を作ったか」において、「宇宙の意志」によって人類は作られたと述べておられます。さらに、「人間は、大宇宙に抱かれている存在であり、知的生命を可能にするように宇宙は進化してきた」と述べておられます。

先に引用したように、鈴木大拙師は、「靈性を宗教意識と言ってよい。」と述べられました。科学時代の現代は、「靈性を宇宙意識と言ってよい。宇宙意識に目覚めることによって始めて宗教がわかる。」と思います。

## 9、おわりに

私が今ここに存在しているという事実を思うと、つまり、私のいのちを見つめると、突然この世に生まれてきてはいません。私に両親があり、両親の出会いが私の存在する直接の縁ということになります。両親の縁をさかのぼってみると、遠い先祖まで、何万年、何十万年と途切れることなく脈々と続いてきた、無数の生命があることに気づかされます。そして、その生命のものは物質であったのです。その物質は、137億年前のひとつの光から生まれて来たものでした。

また私が生きているということは、家族だけでなく、社会の人たちや食べもの、着るもの、水、空気、地球、太陽など自分以外のすべてのものの支えを受けています。つまり私は、自分一人で生きているのではなく、生かされているのです。

いのちを見つめると、私たちは、「大宇宙（ひかり）から生まれて来て、大宇宙（ひかり）に生かされている存在」です。だから、「宇宙の始まりは私という存在の始まりでもある」ということになり、「宇宙は、さまざまな物や命を生み出してきたが、元々はひとつの光が姿を変えたもので、始まってから今までずっとひとつのままだ」と見ることができます。つまり、「ばらばらに物や生命が存在するという見方」から「本来ひとつのものが、相互に依存し合って存在するという見方」に目覚めることになります。「私は、私以外のすべてのものによって生かされている」即ち「わたしは大宇宙に生かされている」ことに目覚めることになります。そのことに気づいた時に出てくる感謝の言葉が「おかげさま」なのです。

「宇宙意識」に目覚めて、「おかげさま」と感謝しながら生活をしたいと考えます。

## 参考文献など

- 1) 山田無文著『禅のさとり』（真人文庫 第一輯、祥福寺真人会、1953年）
- 2) 山田無文『むもん法話集』（春秋社・1963年）
- 3) 盛永宗興編 『禅と生命科学』（紀伊國屋書店・1994年）
- 4) 三木成夫『海・呼吸・古代形象』（うぶすな書院・1992年）
- 5) 鈴木大拙『鈴木大拙全集第八巻』（岩波書店・1968年）

- 6) 桜井邦朋著『命は宇宙の意志から生まれた』(致知出版社・2010年)
- 7) 村上和雄著『生命の暗号』(サンマーク出版・1997年)
- 8) 佐治春夫著『からだは星からできている』(春秋社・2007年)
- 9) 山本空外著『念仏と生活』
- 10) 山本空外著『無二的人間』
- 11) 山崎弁栄著『人生の帰趣』
- 12) 山崎弁栄著『宗祖の皮髄』
- 13) 河波昌著『形相と空』
- 14) 河波昌著『ひかりの現象学』
- 15) 鈴木大拙著『日本的靈性』
- 16) 鈴木大拙全集